

(その時、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた。)
「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。-中略-
さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。-中略-
一タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは-中略-厳しい方だと知っていたので恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。-中略-さあ、そのタラントをこの男から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。』-マタイ 25 章-

～タラントのたとえ～ 忠実な良いしもべ

『だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。』この聖書の言葉は、「思う」という言葉を入れるとよくわかります。『だれでも持っていると思う人は更に与えられて豊かになるが、持っていないと思う人は持っているものまでも取り上げられる。』と読んでみてください。

教会の典礼歴の最後の週を迎えて、わたしたちも自分の人生をどのように終えるべきか、人生の終末を考えさせられる聖書の箇所が読めます。私たちも人生の終わりの時、人生の清算をさせられるのです。人生は、この世で親(神)から預かったタラント(財産)を携えて親の実家に戻っていく旅とも言われます。預かったタラントの差に一喜一憂して、ある者は有頂天になって自らを売り物にし、ある者は悲観して引きこもる。しかし実は、五タラント、二タラント、一タラントという差は、人間的な価値観で見た差であって、神の目には元もと、すべて等しく、一ムナなのです。この事はルカ福音書に書かれています。(ルカ 19.11-27)。

神の価値観は、聖書の創世記に、単純な言い方で見事に記されています。“造られたすべてのものは良かった。”というのです。神の目には造られたすべてが良かったのです。しかし、「善悪の知識の木の実」を取って食べた人類は、すべて良かった存在を、神に成り代わって、判断、評価し「値ぶみ」をし直して、弱肉強食の今の世界にしてしまっているのです。

「神の財産」に価値の比較はありません。いわゆる、『東大』は価値があって五タラント、『無学』は価値がなくて一タラント、『健康』は価値があって五タラント、『病気』は価値がなくて一タラント。こういう顔立ちの人は美人で五タラント、こういう顔をした人は必ず、一タラントなどという、これらはみな人間の好き嫌いで「値ぶみ」した結果であって、神の価値観ではありません。神が造られたものは、全て意味があって、全て等しい「神の財産」です。

ある人は高い能力という財産を預かり、ある人は生まれながらに病気という財産を預かるので

す。そして地上の私たちに神が要求しておられる本当の仕事は、預かった財産で、『神に仕え、神を賛美する』ことです。高い能力を預かった人はその能力で、病気をもらった人はその病気で、『神に仕え、神を賛美して』世に神の栄光をもたらすことができます。その人を神は忠実な僕と呼んでくださるのです。注:タラントはタレント、才能の語源

